

【p 80～p 85】丹波市と丹波篠山市をつなぐ道 —田艇吉—

1 資料活用にあたって

- 丹波市・丹波篠山市の位置を確認する。
- 長文のため事前に読ませておく。
- 資料文頭と文末のアスタリスク（***）の前後は、プロローグ、エピローグとして扱い、80ページの12行目～84ページ15行目で発問構成する。
- 努力に焦点をあてれば内容項目はA（5）であるが、本資料は田艇吉が抱いていた大きな夢に焦点をあてて内容項目はC（17）で扱う。
- 先人の場合、努力を続けることは誰しもあることで、その努力のみ書いてある資料は、内容項目はA（5）で扱い、努力を続けることになった大きな夢が描かれている場合は、その夢で内容項目を定めるとよい。

2 資料の読み方のポイント

- 主人公の変化を問う資料ではなく、主人公（艇吉）の生き方を貫くもの考える資料であり、艇吉の立場で場面を捉えていく。（子どもが「艇吉」になって考えられるように発問を工夫する。）
- 本資料では、「郷土の発展のために鐘ヶ坂峠を整備しなければ」という郷土愛に支えられた信念を貫き、周囲の理解がなかなか得られないなど多くの苦労を克服しながら、トンネルの完成をさせた艇吉の生き方を考えさせる

3 読み物資料の素材について

【参考文献等】

- ・ 田艇吉翁寿像記念帖 松井孝禎編 同建設委員会 1939年
- ・ わたしたちの丹波市 丹波市小学校社会科副読本編集委員会 丹波市 2008年
- 田艇吉について
 - ・ 艇吉は、郷土の発展のため、交通網の整備に重きを置いた。鐘ヶ坂隧道の他にも、現在のJR福知山線の前身となる阪神地方から丹波市を通って、舞鶴へ通じる阪鶴鉄道株式会社を起こした。現在、JR柏原駅前に氏の功績をたたえた銅像が建立されている。

1852年（嘉永5年）	丹波国氷上郡柏原藩領の下小倉村（現在の兵庫県丹波市柏原町下小倉）に田文平の長男として生まれる。
1864年（元治元年）	12歳 儒学者の小島省齋に入門
1870年（明治3年）	19歳 村総代として活躍
1879年（明治12年）	28歳 第一期県会議員に当選後、氷上郡書記、氷上郡長などを歴任
1891年（明治24年）	40歳 衆議院議員となる（当選4回）
1899年（明治32年）	48歳 阪鶴鉄道株式会社取締役社長に就任 帝国電灯、柏原合同銀行などを設立
1938年（昭和13年）	87歳 死去

- 鐘ヶ坂峠について
 - ・ 鐘ヶ坂峠は、艇吉が予見したとおり現在の丹波市、丹波篠山市の交通の要所であった。それは、昭和、平成と次々にトンネルが整備されたことで明らかである。同じ峠に明治・昭和・平成に整備された3本のトンネルがあるところは、全国でも珍しい。明治のトンネル完成を記念して植えられた桜も、毎年春には見事に咲き誇り、今では丹波吉野として観光の名所となっている。
 - ・ 鐘ヶ坂隧道は、煉瓦積み工法のトンネルとしては、日本最古で（現存する道路トンネルとしても日本で5番目の古さ）である。昭和のトンネルが開通したため閉鎖されたが、現在は、鐘ヶ坂公園で行われる桜祭りやもみじ祭などのイベントの際に開放されている。

4 展開の具体例

- ・ **主 題 名** ・ 郷土の発展を願って C (17)
- ・ **資料の概要** ・ 現在の丹波市と丹波篠山市の交流を阻む最大の難所であった鐘ヶ坂峠。艇吉は人々の安全と郷土の発展のため峠の整備を提案するが、人々の理解がなかなか得られない。そんな状況でも、艇吉は整備の必要性を村の人々に訴え続ける。ようやく、艇吉の考えが理解されるようになり、郷土の未来のために語り合う人々の姿が見られるようになる。
- ・ **ね ら い** ・ 鐘ヶ坂峠の整備が村に必要なだという信念を貫き通した田艇吉の姿を通して、先人の努力を知り、郷土を愛する道徳的心情を育てる。
- ・ **展開の具体例**

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応
導 入	・ 学習する道徳的価値に興味を持つ。	郷土の発展を願ってつくられたものを探しましょう。
展 開	・ 資料の範読を聞きながら黙読をする。	
	・ 峠をすべっていく馬力を見たときの主人公の気持ちを考える。	艇吉はすべっていく馬力を見ながらどんなことを考えていたのでしょうか。 ・ 峠を安全に行き来できるように整備できないか。 ・ この地域を発展させるためには何かしなければ…。
	・ 村人たちに理解されない主人公の気持ちを考える。	場の雰囲気が一気に冷めていく中、黙るしかなかった艇吉は、どんな気持ちだったのでしょうか。 ・ 工事が必要性を分かってもらえないことがくやしい。 ・ 地域のためにみんなで力を合わせたいのに…。 ・ みんなが資金のことを心配するのも仕方がないが…。
	・ ことあるごとに峠の話を書き続けた主人公の気持ちを考える。	寄り合いで反対された後も、なぜ艇吉はことあるごとに峠の整備の必要性を訴え続けたのでしょうか。 ・ あきらめたら子や孫に申し訳が立たないから。 ・ 郷土の将来のために何かしなければと思ったから。 ・ 峠だけではなく二つの村も時代から取り残されると考えたから。 ・ このままでは、この地域がすたれてしまうと思ったから。
・ 未来のために語り合う皆の姿を見たときの主人公の気持ちを考える。	語り合うみんなの姿を大きくうなずきながら見つめる艇吉は、どんなことを考えていたのでしょうか。 ・ これで峠の整備が進み、この地域は発展するぞ。 ・ 峠を挟んだ両地域の未来が楽しみだ。 ・ 郷土を愛するみんなの思いが一つになれば大丈夫だ。	
終 末	・ 自分の考えを書く。	考えたことを道徳ノートに書きましょう。

社会科で学習した丹波地域の場所を復習しておく。

主人公に「郷土のために何とかしなければ」という気持ちが起こっていることをおさえる。

郷土のためにみんなで力を合わせることができず、くやしい思いをしている主人公の心を考えさせる。

主人公が「峠の整備は郷土のためになる」という信念を持ち続け、必要性を訴えていることをおさえる。

「愛する郷土を何とか発展させたい」という心情が主人公の行動を支えたことをおさえる。